コメント& ディスカッション

中屋信彦*

本論文「関係重視型経営の特性と社会的合理性：イスラーム的経営を中心として」は、イスラーム教の教義から抽出される関係重視型の経営モデルに焦点をあて、その現代的意義と可能性について検討したものである。

関係重視型経営とは、異文化経営の領域において、人間的要素の強いウェットな関係が売買や投資・雇用などの経営のあらゆる関係を規定する経営スタイルをいう。これとは逆に、人間関係を構成する種々の諸関係から取引関係を切り出し、これを制御の対象とし、ビジネス以外の要素を可能な限り排して効率を高めるドライな経営スタイルを取引重視型経営という。筆者は、合理性・効率性を強調する取引重視型経営への過度な傾斜が、現代社会において様々な社会矛盾を引き起こしていることを念頭に、人間的要素の強い関係重視型経営の価値を再評価している。

筆者が注目するのはイスラーム社会である。イスラーム社会は、取引重視型経営が幅を効かせる今日にあってなお伝統的な関係重視型経営を維持しており、比較的安定した社会を保っている。筆者はその背景を信仰とビジネスが密接に結び付いたイスラーム教の教義に求め、教義中の「創造論」や「存在論」に遡って分析することにより、その世界観や社会観を簡潔に要約抽出している。そのうえで、その世界観や社会観を具現する組織形態として「パートナーシップ」を取り上げ、①資金提供者と事業家のパートナーシップ（イスラーム金融など）、②ムスリムと異教徒のパートナーシップ、③男性と女性のパートナーシップ、④営利部門と非営利部門のパートナートップ（喜捨や寄進など）について検討し、関係重視型経営の宗教的基礎構造を解明している。

周知の通り、イスラーム諸国は、世界金融危機や資源価格の高騰を背景に、現在、新興諸国としての存在感を高めている。これに伴ってイスラーム金融やイスラーム・ビジネスをテーマとした著作が数多く登場しているが、実用性を重視するせいか、イスラーム教の「存在論」に深く根ざした経営実践の構造を分析した研究は多くない。こうした点において本論文の学術的貢献は大きいと言えるだろう。

その際、一点注意しなければならないのは、本論文で整理されたイスラーム的経営は、現実のイスラーム社会を参照しつつも、あくまでイスラーム教の教義から抽出されたモデルであるということである。この点、筆者も注意を促しているが、このモデルがそのままイスラーム諸国において全面的に実現されている訳ではない。様々な要因によって、現実にはモデルとの乖離が存在している。例えば、最近注目されているイスラーム金融にしても、その先進国マレーシアの普及率は企業向け貸出残高ベースで 2 割程度である。短期間の発展には目を見張るものがあるが、やはりモデルが現実として全面的に存在している訳ではない。では、モデルは全くの絵空事なのかといえば決してそうとも言えないところが

宗教の面白いところである。モデルに整理された特徴は、イスラーム社会の随所において確かに存在し、多数はではなくともひとつの傾向として体感することができる。そして、それは近年の宗教回帰によって強まりつつある。そういう意味において、このモデルはイスラーム社会における経営の基本モデルとして十分に参照価値のあるものといえるだろう。

*名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター准教授